

話題&レジェンド物語

弥生の3月。待ち遠しかった春の風が暖かい。3日のひな祭、冬ごもりしていた虫が地上に顔を出すといわれる6日の啓蟄が過ぎ、14日はホワイトデー。バレンタインデーで贈り物を受けた方は要注意。21日は昼夜の長さが等しい春分だ。春の陸上シーズンが始まる季節だが、マスターズの活動はまだだ。今月も新しいニュースがなく、話題とマスターズを彩るレジェンドを交えて、お届けしたい。

写真／倉津雅一さん、福本幸さん

12345は何の数字 44年ぶりにリベンジ果たした

長崎県五島列島に住み、W80クラスの走幅跳で2m94の日本記録を持つ倉津緑さん（84歳）から届いた話。ニュースは昨年10月に東京・国立競技場であった「みんなでつなごうリレーフェスティバル2022」について。東京にいる甥っ子の倉津雅一さん（62歳）から緑さんに連絡があった。「44年前の高校生のときの陸上部仲間たちと出場した」という内容。

このイベントはマスターズではなく、日本陸連が主催したものだが、倉津雅一さんの話に耳を傾けてみよう。雅一さんも五島列島の出身。県立上五島高に学びながら、クラブ活動が陸上部だった。当時の陸上仲間だった堤政二（しょうじ）さん（61歳）、安田宏さん（61歳）、宇戸政雄さん（62歳）ら4人で、200歳以上クラスの4×100mRに参戦した。カルテットのうち、堤さん、安田さんの両人は地元五島に住み、宇戸さんは福岡県に住んでいる。

出場を呼び掛けたのは雅一さんだった。きっかけはこうだ。高校生時代の1978年、4×400mRでインターハイ出場を目指したが、北九州大会を突破できず、涙をのんだ。悔しかった。悔しさは年を追っても消えなかった。

雅一さんは東京で高校生中心に陸上指導を行っており、昨年6月ごろにリレーのイベントがあることを知り、仲間に「国立でウサを晴らそうや!」と声を掛けたのだ。かつての陸上部員



友情のバトンをつないだ左から堤さん、安田さん、宇戸さん、倉津さん

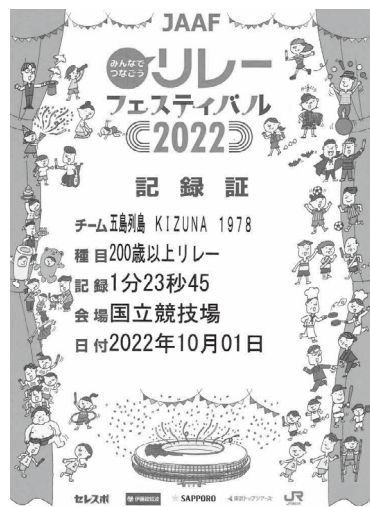
も「走りたい」の思いは同じだったが、ブランクが長すぎた。4人のうち堤さんはアキレス腱やヒザ、安田さんもアキレス腱を痛めるなど、体調万全ではなかった。

だが、カルテットの「走りたい」の思いは強かった。「ようし、国立で走ろうや」。それぞれ各人で練習を重ねて、大会の日を迎えた。『五島列島 KIZUNA 1978』のチーム名でエントリー。1本のバトンに4人の気持ちを込めて、いざスタート。

オーダーは1978年当時と同じ1走から堤さん、安田さん、宇戸さん、雅一さん。「走る仲間を応援しよう」と各地から約20人の友人たちが集まり、声をからして応援した。1本のバトンはゴールまで無事に渡った。

ここからがミソだ。4人が力走した

タイムは1分23秒45。この数字を並べると〈12345〉。きれいに並んだ数字にみんなが笑った。



数字がきれいに並んだ記録に、思わずみんなの頬が緩んだ

雅一さんは「順位は分かりませんが、しっかり絆が繋がりました。バトンが4人を44年ぶりに結び付けて。まったくのユックリ走だったけれど、みんな“楽しかった”の表情でよかった」と。

ほかのランナーも「当時のリベンジができてよかった。かつての4人で再びバトンをつないだことが誇らしい」と声をそろえた。4人の中で1人は以前、マスターズへ登録していたそうだが、再びこのメンバーでマスターズの年齢別リレーに出てほしいものだ。

福本幸さん(46歳・大阪) 夫と二人三脚で走高跳に挑む

W45クラスの走高跳では飛び抜けた存在だ。マスターズへ登録した2016年、39歳で跳んだ高さは1m73とケタ外れ。W35クラスでこの高さを、W40クラスでは1m75と高さを上げた。いずれもマスターズの日本記録だ。

1m73を越えた2016年には、マスターズへ入会する前に1m75を跳んでおり、日本陸連の記録ランクで9位と、10位以内のレベルの高さだった。福本さんの旧姓は青山。12歳から走高跳に取り組みはじめた。今では46歳となり、超ベテランとして活躍中だ。

大阪・淀中時代の1991(平成3)年、第18回全日本中学校選手権で1m73を跳び優勝して注目された。高校は隣県の兵庫・夙川高へ。高3の1994年に1m81と全国級の記録を出しながら、1年生からインターハイで入賞はしたものの優勝はない。

インカレでは甲南大から中京女子大大学院に進んだ1999年から3連覇を。卒業後は吹田一中(大阪)に奉職した後、母校の甲南大で陸上部の指導に当たった。マスターズへ入会した年に豪州パースであった第22回世界マスターズ大会に夫の義永(よしひさ)さん(43歳)とカップルで参加した。

マスターズに入会して初の国際競技会だったが、義永さんはM40クラスで2m02を跳び、幸さんは1m73と

そろって一番高い表彰台へ。「楽しい大会でした」と口をそろえた。

マスターズに入って上々の滑り出しを見せたカップル。翌年3月に韓国・大邱での2017世界マスターズ室内大会へは義永さんだけが出場して、M40・走高跳に2m01で2位の成績を収めた。パースの世界大会は10月だったが、その前の9月に新潟で行われた第37回全日本マスターズ大会へも参戦した。

こちららカップルでの出場で、義永さんは1m90、幸さんは1m70でこもそろって優勝。義永さんは2位の1m60に30cm差、

幸さんは2位の1m20に50cm差をつけての1位だった。当時の所属は義永さんが京都、幸さんは兵庫だった。

2017年の第38回全日本マスターズ大会はマスターズ発祥の地、和歌山で。44歳の義永さんはM40・走高跳で1m90、W40クラスになった幸さん(40歳)は1m70と1年前と同じ記録で、お互いにトップ。

全日本マスターズ大会の第39回鳥取シリーズは義永さんだけが出場し、M45クラスで1m90と連勝記録を伸ばした。この年の2018年に世界マスターズの第23回大会がスペインのマラガで行われた。マラガは同国の有名な画家ピカソの生誕地として知られ、国際的なリゾート地でもある。

結果はカップルに凱歌。義永さんがM45クラスで1m91、幸さんはW40クラスで1m73の記録で、ともに世界大会2連勝だ。ところで成績とは別に「試合に臨むまでが大変だったんです」と幸さん。当地に行くまでのてんやわんやとは――。

出発予定の関西空港が閉鎖され、当



2年前の記録会での福本幸さん(右)と光玖さん。光玖さんは現在身長が167cmあり、中学に進学する今春から本格的に陸上競技に取り組む

日に航空会社になんとか連絡が付き、急きょ羽田空港からバンコク、パリと乗り継いで48時間後、ようやくマラガに到着したのが、試合当日の深夜1時ごろ。仮眠を取る暇もないまま試合へ。「ピットに立ててよかった、と思いました。この大会ほどあわてたことはありません」と笑いながら話す。

幸さんは中学生の頃から背面スタイル。ベストは2004年の1m92と、日本歴代上位の高さ。走高跳一筋で歩んだ日々は順風満帆だった訳ではない。足膝をこわしたり、半月板を手術したり、ケガを克服しての競技続行中だ。現在も「体づくりの毎日を繰り返しています」と努力を続けている。

マスターズのW45クラスで跳び続ける幸さんは、実業団対抗の試合にも目を光らす。目標は44歳のときの1m70より上の「1m72を跳びたい」。今年中に50歳となる夫の義永さん、春から中1となる娘の光玖(みく)さん(12歳)も両親の血を引いて走高跳に挑む。走高跳一家の活躍に期待大だ。